

## Beta-Blocker Use Is Associated With Prevention of Left Ventricular Remodeling in Recovered Dilated Cardiomyopathy

円山, 信之

<https://hdl.handle.net/2324/4784505>

---

出版情報 : Kyushu University, 2021, 博士 (医学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : (c) 2021 The Authors. Published on behalf of the American Heart Association, Inc., by Wiley. This is an open access article under the terms of the Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivs License.

(別紙様式2)

氏名	円山 信之
論文名	Beta-Blocker Use Is Associated With Prevention of Left Ventricular Remodeling in Recovered Dilated Cardiomyopathy
論文調査委員	主査 九州大学 教授 塩瀬 明 副査 九州大学 教授 山浦 健 副査 九州大学 教授 鴨打 正浩

## 論文審査の結果の要旨

【背景】 心機能の改善した拡張型心筋症症例において、至適薬物療法の中断は心不全再発と関連することが報告されている。しかしβ遮断薬が心不全再発と関連するかは検討されていない。申請者らは心機能の回復した拡張型心筋症症例において、β遮断薬の中断がその後の左室駆出率の推移に与える影響を検討した。

【方法】 厚生労働省により行われている難病法に基づく医療費助成制度の臨床個人調査票を用いた。2003年から2014年に拡張型心筋症の臨床個人調査票に登録された症例を対象とした。左室駆出率の回復した拡張型心筋症は、「過去に左室駆出率が40%未満であり、その後40%以上に改善した症例」と定義した。適格症例をβ遮断薬の有無により2群へ分け、傾向スコアマッチングを行った。主要評価項目は2年後の心エコーにおいて、左室駆出率がベースラインから10%より大きく減少すること、と定義した。

【結果】 5,370名の適格症例の内、4,104名がβ遮断薬を内服していた。傾向スコアマッチングにより1,087名ずつのペアが算出された。傾向スコアマッチング後の平均年齢は61.9歳、男性は1,619名(74.5%)、平均左室駆出率は $49.3 \pm 8.2\%$ で、BNPの中央値は46.6(四分位範囲 18.0-118.1) pg/mlであった。主要評価項目である左室駆出率の10%より大きい減少はβ遮断薬内服群において少なかった(19.6% vs. 24.0%、オッズ比0.77;95%信頼区間 0.63-0.95、 $P=0.013$ )。サブグループ解析では女性は男性と比較して、治療効果が大きい結果であった(女性:オッズ比 0.54、95%信頼区間 0.36-0.81、男性:オッズ比 0.88、95%信頼区間 0.69-1.12、交互作用項の $P=0.040$ )。

【結論】 β遮断薬の内服は左室駆出率の改善した拡張型心筋症症例において、左室収縮能再悪化の予防と関連した。

以上の実験結果はこの方面の研究に新知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、実験結果等について説明を求めた。各調査委員より専門的な観点から論文内容およびこれに関連した事項について種々質問を行ったがいずれについても適切な回答を得た。

よって調査委員合議の結果、試験は合格と決定し、博士(医学)の学位に値すると認める。